

贖罪論からの脱却



なかじま みねお
中嶋嶺雄
●東京外国語大学教授

——天皇陛下御訪中の話がいろいろと出ています。この時期に、天皇陛下に御訪中していただくのはどうなのでしょう。か。

中嶋 この問題で世論が二分することはよくない、と私は考えていますから、できればノーコメントにしたいところですが……。中国専門家の立場からすれば、タイミングは必ずしもよくない。中国のながが、ある意味では二つに割れている。改革・開放といながら、鄧小平は必ずしも万全ではない。波瀾含みのなかで天皇が御訪中されることには、問題がある。しかし、中国にとっては、いま天皇御訪中がぜひ実現してほしいでしょうね。

日本を例外とすれば、中国は国際的に孤立し、アメリカをはじめとする西側諸国との関係がけつしてうまくいっていないからです。サラリと天皇が御訪中されるような雰囲気がつくられればよかったです、日本国内でも政治問題になってしまった。

——政府は、難しいという判断に傾いているのだと思います。

中嶋 傾いていますね。この論争を賛否両論、侃々諤々かんかんげつげつやすることは、天皇外交とか皇室外交を不必要にクローズ・アップさせてしまう。

ただ、いつまでも、贖罪論とか軍国主義論とか、アジアの土壌のなかに、日中関係を閉じ込めておいていいのかわるか。現在出ている議論はいずれも、従来の日中関係の枠組みだけで考えている賛否両論だと思うのです。

——そうすると、本来の日中関係はどうあるべきなのでしょう。か。

中嶋 基本的に、日本と中国というバイラテラルな関係ではなく、アジア全体、世界全体というグローバルな座標軸のなかで日中関係を見ていくべきだと思います。

冷戦終焉後、全世界から脚光を浴びているのはアジアです。日本が中国と一体化してアジア圏を考えるのか、それとも、グローバルイズムの立場から、もっと開かれたアジアを考えるのかという、二つの選択肢が出てくる。

——そこが、伺いたかったところで。

中嶋 アジアが強くなることは目に見えていますし、日本が今後、世界の先頭を走っていかなければならないだけに、むしろグローバルイズムの立場から、より相互に互換性のあるアジアの国際システムを考えていかなければいけない。

アジア主義かグローバリズムか。日本は過去、アジア主義で失敗してきたわけです。

——シベリア出兵以来、あまりいいことはなかったですね。

中嶋 アメリカもソ連も駄目になったから、今度は日本がアジアの立場から世界をリードしなければいけないという考え方がありますが、自由にせよ、民主主義にせよ、西欧近代が生み出した人類の普遍的価値を、アジアの大国日本があくまでも堅持することこそ、開かれたアジアをつくっていく重要なポイントです。そういう大きな岐路に、日本はいま立っているのではないかと思います。

——その場合、日中間には伝統的な同文同種論、厄介な贖罪論があります。日本がそこから脱却した、新しい対中関係を築けるでしょうか。

中嶋 その際、日中関係における従来の情緒的反応からも脱却しなければいけない。アジア、とくに東アジアはたしかに儒教文化圏です。儒教的な精神風土が、ひとたびテイク・オフした社会では、工業化や産業化に非常にプラスになったと思います。

しかし、この議論を進めていくと、ほかの文明圏は駄目だということになってしまふ。中国は昔から、自分が宇宙の中心で、世界は貢ぎ物をもってこなければいけないという朝貢外交のパターンです。

その意味からも、従来の日中関係の座標軸から日本が離れることこそが、開かれたアジア主義をもたらす。中国自身はほんとうに近代化しようと思うならば、そうした自己中心的な中華思想の世界から脱却していかなければいけないと、いまこそ日本は中国に対して主張していくべきだと思います。

——日本自身も、昔のことは関係ないよと、もつと堂々とした態度をとってもいいと思います。やることを堂々とやれば、中国人も尊敬してくれるのではないのでしょうか。

中嶋 中国自身がまだそういう発想に立てないから、すぐ軍国主義の復活だとかいう、さっきの座標軸に戻ってくるのです。

——日本が国際貢献を果していくには、従来の日中関係の座標軸から脱却しなければならない。しかし、それはなかなか難しいとなると、日本がアジアのなかで貢献することすら、難しくなるのではないのでしょうか。

中嶋 中国のいうことをあまり気にしないで、堂々とやればいいと思う。日本が国際貢献できる機会があるのなら、どんなやればいい。

ただ、閉ざされたアジア主義の立場から国際貢献をするとなると、大東亜共栄圏なんて思われるから、一方では人権や環境の問題といった、グローバルな課題について、日本は最大限に自覚しながら、国際貢献もやる。そういう意味で、徹底的にグローバリゼーションをやっていくという立場をと

れば、西側諸国からもアジアの近隣諸国からも、理解を得られるのではないでしょう。

献身の徳が似合う国



かわ かつ へい た
川勝平太
●早稲田大学教授

——このところ「アジア主義」をめぐる議論が盛んですが、日本は歴史的に、アジアとどのようにつき合ってきたのでしょうか。

川勝 日本人は、何千年ものあいだ、中国を中核にして自らを位置づけてきました。それは日本だけではなく、韓国もベトナムも、周辺地域はみなそうです。ですから、中国が強大で安定しているときは、日本を含む周辺諸国はおとなしいという構図でした。

ところが、近・現代の中国は安定性をなくし、十九世紀半ばの阿片戦争から弱体化しはじめ、周辺地域は日本を先頭に元気がよい。

この間、日本が西欧文明をいち早く受容し、「近代化」という新しいファクターを入れたアジア間関係が形成されました。

しかし、基本的なパターンとしては、中国の浮沈に周辺地域が規定される、という地政学的関係は依然としてあると思います。

かりにアジアで、EC統合の真似をしようといっても、ヨーロッパの場合は、各国の力がほぼ拮抗しているし、人口も、それなりにバランスがとれています。しかし、人口だけ見ても、世界の四分の一を占める中国は突出しており、ECのように労働力の自由移動を認めれば、アジア全域に華僑が浸透し、緊張が高まるでしょう。

アジア主義は、中国を取り込まねばならず、中国が入ると、均衡を失う。統合はアジアには馴染まない。多様なアジアには「住み分け」的共存がよく似合うと思います。

——「アジア主義」の危険性については、どのようにお考えでしょうか。

川勝 アジア主義はうまくいかないだろうと思います。明治期に、西洋文明に対するアジアの自立という脈絡で大アジア主義が出てきましたが、大失敗に終わっています。

大東亜共栄圏については、三木清（哲学者）が「民族ごとに違う文化があり、多民族的な民族文化が多民族的なままに栄える共栄圏というのが、望ましい唯一のやり方だ」といった。

しかし、そういう理念はかき消され、日本人は「八紘一宇」の一元的で全体主義的なイデオロギーで突っ走り、奈落に落ちた。